
苦手な人ほどうまくなる英語

グロービッシュ入門

Globish

はじめに 逆転の発想で 今日から英語が話せる!

■ なぜ日本人は英語が苦手なのか?

なぜ日本人は英語を話せない人が多いのでしょうか。

話せないという人のほとんどが、「自分には話すための知識も技能も不足している」と考えます。そして、「もっと勉強しなければ」「ネイティブの先生に習わなければ」とか、「環境を変えなければ無理」「聞くことのほうが大切だから」などと理屈をつけて、英語を話そうとさえしません。

しかし、その人たちは、ほんとうに、話すための知識も技能も不足しているのでしょうか？ 私はそうは思いません。私たちは中学や高校で数百時間英語を勉強しているはずです。話せるようになるためには、逆転の発想が必要なのです。

私の経験から言うと、普通の日本人は、英語の知識をしっかりと持ちあわせています。ただそれを使おうとしないだけです。いや、知識が多すぎるために、話せないのです。

学生のころ、ハワイに遊びに行った時の話です。

泳ぎに行こうと思ってホテルを出たものの、海岸の方向が分かりません。そこで通りがかりの観光客にこう尋ねました。

Where's the beach? (浜辺はどちらでしょうか)

ところが、その外国人は、英語が理解できませんでした。しゃべる言葉は、どうやらフランス語のようです。私のほうはフランス語は、ほとんど知識がありません。

ただ、「海」が la mer (ラ・メール) ということは、シャンソンの歌

詞から知っていました。そこで、きょろきょろしながら、“La mer?” (海は?) と尋ねると、彼は、にっこり笑い、身振り手振りで、「その先を右に行って、左」と教えてくれました。

こんなふうには、単語さえ知っていれば、道を尋ねるくらいの会話はできてしまいます。というよりも、私は単語しか知らなかったから、話すことができたのです。

実は英語に関しても同じことが言えます。

私たちの受けてきた英語教育は、ひたすらネイティブスピーカー (英語を母語とする人)、それも欧米の一定の地域で話される英語をお手本としてきました。そして、少しでもそれに近づくように、お金と時間をかけ、苦勞してさまざまな学習をし、訓練を受けてきました。

そうこうしている間に、私たちを取り巻く英語の環境は大きく変わりました。

まず、数十年前と違って、今では英語を話す相手の大半は、ネイティブではなく、非ネイティブになりました。これは、その当時は想像もしなかったことです。

ビジネスの場面で、日本人と韓国人、香港の人とベトナム人、タイ人と中国人などの間で交わされる言語はたいてい英語ですが、彼らはネイティブスピーカーではありません。

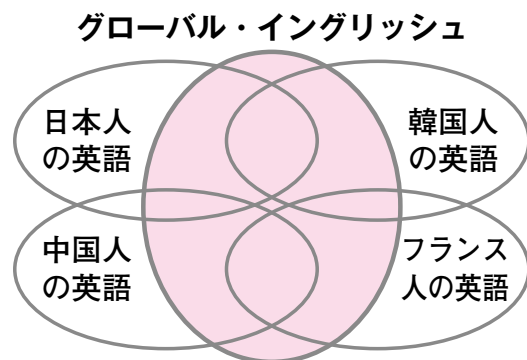
彼らの中には、非常に流暢に英語を話す人もいますが、たいていはとても完璧と言えるレベルではありません。少し複雑な話題になると、お互いについていけなくなります。

そんなとき、どちらかが、あるいはお互いが歩み寄って、平易で分かりやすい英語を話すことができれば、コミュニケーションを続けることができます。

さらには、あらかじめ語彙や文法について、共通の使用範囲を決めておき、その範囲の中で英語を使うようにすれば、どちらかがついていけ

なくなることもないでしょう。

以上のような、英語を取り巻く状況の変化の中で注目を浴びるようになったのが、「グローバル・イングリッシュ」(GE)という考え方です。簡単に言うと、非ネイティブの人たちが現実に使っているいろいろな英語の亜種について、その共通の部分を抽出し、ひとつの枠組みとして使うようにしようという試みです。



グローバル・イングリッシュという考え方の中には、共通性という視点の他に、もうひとつ重要な考え方があります。

それは、「英語の諸事象の基本的な部分を抽出する」という考え方です。共通性ばかりを追求すると、その枠組みは際限なく広がります。しかし、コミュニケーションの道具としての利便性や、学習目標の設定を容易にするためには、世界的な傾向を把握した上で、できるだけコンパクトなルールにする必要があります。

■ グロービッシュの登場

以上のような考え方に基づいて、ジャン＝ポール・ネリエールというフランス人が、『世界のグロービッシュ』(原題: *Globish The World Over*) という本を通じて提唱したのが、「グロービッシュ」という「世

界共通語としての英語」です。

その基礎になっている考え方は、普通の英語に対して、次のような枠組みを設定して、それを共通のプロトコル(お互いの約束ごと)として使おうというものです。

- ① 使用語彙を基礎的な 1500 語(派生語を含めると 4500 語)に制限する。
- ② 文法は、24 項目程度の簡易なルールを適用する。
- ③ 発音は、相手の理解を妨げない範囲なら、厳密なものを求めない。
- ④ イディオム(慣用句)やユーモア、比喩的表現は使わない。
- ⑤ ひとつの文は、できるだけ 15 単語以内とする。

その他、いくつかの基本ルールがありますが、以上の 5 つがもっとも大切なこととなります。

たったこれだけのことなのですが、これは画期的な提案です。

実は、過去 2、30 年の間にも、これと同じような構想を持ち、提案した人は、ネリエール氏以外にも内外にたくさんいました。しかし、そのどれもが、「日本人の英語」のように限定したものであったり、具体的な枠組みが明らかでなかったりして、それを「英語で」世界に向けて発信しようとしたものではありませんでした。

また、仮にグロービッシュと同じ内容の提案が出されたとしても、それが 20 年前どころか 10 年前なら、世界中から注目されることはなかったでしょう。世界情勢の変化に伴い、非ネイティブの人たちが猛烈な勢いで英語を学び、使い出したのは、ここ 10 年ほどのことだからです。

本書では、以上のような状況を踏まえて、グロービッシュの学び方や使い方、実際のコミュニケーションの場における応用のしかたについて考えていきたいと思えます。



〈はじめに〉 逆転の発想で今日から英語が話せる!..... 2

- なぜ日本人は英語が苦手なのか?..... 2
- グロービッシュの登場..... 4

本書の構成と使い方..... 10

第1部 苦手な人ほどうまくなるグロービッシュ

グロービッシュの本質..... 14

- グロービッシュの本質は、「英語で分からせる技術」..... 14
- 初級者のほうがグロービッシュの上達が速い理由..... 17
- 音読で会話力はすぐ分かる..... 19
- テストで英語力は評価できるのか?..... 20
- 企業にとって重要なパフォーマンス能力..... 21

通じるための発音の要領..... 23

- 言語を学ぶ基礎となる「音法」..... 23
- 太鼓言語とラップ言語..... 23
- ストレスのない母音は、いつでも「あいまい母音化」する..... 25
- 正しく発音することがリスニング力を向上させる..... 26
- カタカナ表記は「有害」か..... 27
- 子音が重要な英語..... 28
- 意味の切れ目には、ポーズをおく..... 29
- 英語のリズムで話す..... 31

コミュニケーションのコツ..... 33

- 言葉だけがコミュニケーションの手段ではない..... 33
- コミュニケーションには戦略が必要..... 34
- 読みやすさの指標..... 35
- 会話で予想されるキーワードを調べておく..... 37
- 会話では主導権を握る..... 37
- 質問には質問で返す..... 38
- 気後れする相手は、専門領域に引きずり込む..... 40
- 文の構成力より音声による表現力が大切..... 41
- 書き言葉では文法がおかしくても、話し言葉では通用する..... 43

第2部 グロービッシュなら 1500 語だけで話せる

あなたの単語力は?..... 46

- 〈第1段階〉カタカナ語・外来語として知っている（はず）の日常語..... 47
- 〈第2段階〉中学で必ず習う単語..... 48
- 〈第3段階〉高校初級までに習う単語..... 49
- 知っている単語を使えるか..... 51
- さらに重要な「キャッシュ単語」..... 53
- 単語のふやし方..... 54
- 連語のチェック..... 55
- [第1段階] 中学で学ぶ程度の連語..... 56
- [第2段階] 高校初級で学ぶ程度の連語..... 57
- イディオム抜き表現法..... 59
- [第1段階] 中学で学ぶ程度の熟語・イディオムの言い換え..... 61
- [第2段階] 高校初級程度の熟語・イディオムの言い換え..... 62

■ 単語力テストの解答..... 65

基本動詞のチェック 67

- ① come (来る、近づく、～になる) 67
- ② get (着く、到着する、～させる) 69
- ③ give (与える、もたらす、伝える) 70
- ④ go (行く、始まる、当てはまる) 72
- ⑤ have (所有する、～する、～してもらう) 73
- ⑥ keep (保有する、続ける、しないでおく) 75
- ⑦ make (作る、成る、引き起こす) 76
- ⑧ put (置く、付ける、ある状態にする) 78
- ⑨ run (走る、流れる、続く) 79
- ⑩ take (取る、連れて行く、ある行動をする) 81

■ 基本動詞テストの解答 83

第3部 文法もこれだけのグロービッシュ**文法力のチェック** 96

- [第1段階] 基礎問題 96
- [第2段階] 発展問題 98
- [第3段階] 応用問題 100

■ 文法力テストの解答 103

グロービッシュの文法 107

- 24の文法項目 107
- 5つの文型 108
- それでも文法は、しっかり学ぶ必要がある 109
- 文法を学ぶのに必要な2種類の本 110

忘れてよい文法事項 112

- 文を補足して時間も表す 112
- 文の構造を複雑にする表現形式は避ける 113
- 書き言葉の文法は使わない 114

書く力はこうして磨く 116

- 書く力は「最終技能」 116
- ライティング力の強化法 117
- 英語の発想の違いに留意する 119
- 「脱和文英訳」を目指す 120
- 英語で発表する 122

第4部 グロービッシュでこんなに話せる**グロービッシュ基本英文集** 126

- [日常会話] あいさつ、あいづち、食事、道案内 126
- [海外旅行] 入国、レンタカー、買い物、レストラン 132
- [ビジネス] 電話での対応、プレゼンテーション、価格交渉、会議 137

グロービッシュ単語リスト 143**〈おわりに〉世界を変えるグロービッシュ** 198

装幀：本山吉晴 本文レイアウト：田松光子
DTP：株式会社 秀文社 編集協力：株式会社 ぶれす

苦手な人ほどうまくなる

グロービッシュ

「苦手な人ほどグロービッシュはうまくなる」などと聞いたら、そんなことはあり得ないと思うかもしれません。しかし、「聞き・話すこと」に限って言えば、これは本当の話です。

なぜそうなるのか。理由は簡単です。グロービッシュでは英語に制限を設けるわけです。そのため、むしろネイティブやそれに準ずるような流暢に英語を話す人は、限られた言語材料に慣れるためのハンデを感じ、苦勞するはずです。

逆にそれほど「できない人」「苦手な人」は自分の使っている多少貧弱な英語から範囲をちょっと広げるだけなので、これまでのように先の見えない大海原に向かって泳ぎ始めるような抵抗感は生まれません。しかも、限定された英語でも十分意思の疎通ができることが分かり、英語を話すのが楽しくなるはずです。

このように「苦手な人にやさしく、得意な人に厳しい」のがグロービッシュなのです。

グロービッシュの本質

■ グロービッシュの本質は、「英語で分らせる技術」

すでに述べたように、ネリエール氏が提唱する「グロービッシュ」にさきがけ、「グローバル・イングリッシュ」という考え方は、さまざまな学者や有識者が古くから提唱してきました。

しかし、それらは、以下の理由によって、一般に広がる機会が得られませんでした。

- ① 通常英語のネイティブスピーカーと比べ、非ネイティブは英語を話す機会がそれほど多くなく、グローバル・イングリッシュの必要性を感じる人が少なかった。
- ② 米国の政治力、経済力が他の国に比べて圧倒的に強く、ネイティブの英語を学び、使うことの利便性のほうが高かった。
- ③ グローバル・イングリッシュの提唱者の多くが、その概念について述べるに^{とど}まり、具体的な枠組みやルールなどを世界に向けて「英語で」発信した人がほとんどいなかった。

時代は変わり、以上の理由の①と②は過去のことになりつつあります。③については、ジャン＝ポール・ネリエール氏とデイビッド・ホン氏が、その著書を通じて世界中にその概念を知らしめたことにより、一定の共通理解ができつつあります。

しかし、その枠組みは、ごく簡単なものであり、各国の言語事情や教育事情をすべて勘案したものではありません。

こうした提案に対しては、おうおうにして誤解による拒否反応が起こ

ります。その代表的なものは、以下のようなコメントです。

- ① 1500 語程度の単語で、森羅万象についてコミュニケーションできるはずがない。
- ② 文法や発音ルールからはずれた英語は、ネイティブには理解できないだろう。
- ③ 「特殊な英語」を学ぶことは、「まともな英語」学習のさまたげとなる。

このような指摘は、大半は、的外れです。また、こうしたコメントを出す人たちは、英語についての知識は深いものの、世界の経済活動の現場で使われている英語の実相についてあまり詳しくなかったり、自分自身が英語を使ってビジネスの先端に立つ機会がなかったりすることが多いようです。

また、ネイティブの人たち同士でも、「分かりやすい英語」「シンプルな英語」を普及させようという動きは何十年も前からあり、それはそれで意味のあることです。

しかし、非ネイティブの人たちにとっては、英語を学ぶこと自体にさまざまな問題があるので、ネイティブにとっての「やさしい英語」をそのまま目標とするのには無理があります。

一方、ネイティブにとっては、グロービッシュは、けっして「簡単な英語」ではありません。ネイティブスピーカーや普通の英語がかなりできる人にとっては、むしろ「やさしい英語で話すこと」のほうがむしろやさしいはずで

ちなみに次の日本語を、外国人にも分かるように、やさしい日本語にしてみてください。

- ① あの人、今、飛ぶ鳥を落とす勢いだ。
- ② 部長から呼び出されたときは、針のむしろだった。

「飛ぶ鳥を落とす」「針のむしろ」のように、ことわざや日本の文化、あるいは歴史的なことがらに基づく表現は、それ自体をイメージできないと、やさしい言葉で表現するのは簡単ではありません。

同じことが英語表現についても言えます。

次の英語を、簡単な英語に直してみてください。使われている単語は、どれもやさしいものです。

Don't carry a chip on your shoulder.

carry [have] a chip on ~'s shoulder で「挑戦的な態度をとる」という意味のイディオムですから、Don't be challenging. の意味になります。

これも、西部開拓時代のアメリカで、木片を肩の上に置いて「落としてみろ」と挑発することからケンカが始まったという故事来歴を知らなければ、何のことか分かりません。

このように、母語であれ外国語であれ、**本来の意味が分からないものをやさしく言い換えることはできませんし、それを他の外国語に直すとなれば、さらにむずかしいことになります。**

むずかしい言葉や慣用表現は、覚えれば誰でも使えますが、それを相手の理解力に合わせて、やさしい表現にするほうが、ずっと苦勞するものです。

グロービッシュのいちばん重要な柱は、「安易な英語を安易な方法で学ぶ」のではなく、一定の英語力の中で、分かりやすい英語を使いこなせるようにすることにあります。

ポイント1

むずかしいことをむずかしく言うのは簡単だが、それを分かりやすい表現にするには特別な技術や練習を必要とする。

■ 初級者のほうがグロービッシュの上達が早い理由

ネイティブスピーカーや英語を得意とする人にとっては、語彙を制限されたり、イディオムを使わずに話したりすることは、とてもむずかしいことです。

いつも高速道路をオートマチック車で走っている人が、急にギア付の車に乗り、狭い路地に入り込んで、ギアシフトを頻繁にしながら走らなければならないようなものだからです。

幼児との会話も同じです。彼らの語彙は限られていますから、大人が彼らに話しかけるときは、その範囲内で話さなければ通じません。しかし幼児同士は活発におしゃべりをしています。

彼らの会話を観察していると、ほとんどが「やーだ」「やめて!」「あっち行って」のように、1語から2語の文です。保育士さんたちは、彼らの言語の法則をわきまえていて、その法則の中で彼らとやりとりをしています。

保育士さんや幼児の家族のように、ふだんから子どもの会話を聞き慣れている人にとっては、「幼児語」で話すことは楽です。もちろん、子ども同士も、お互いに使う語彙や文法に一定の枠組みがありますから、コミュニケーションがとりやすくなります。

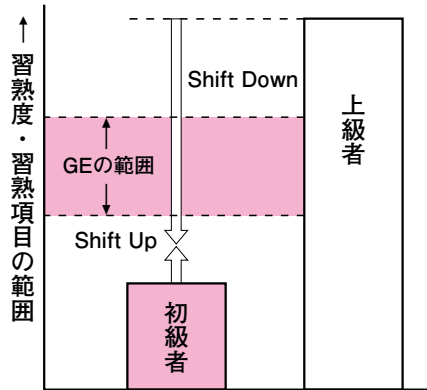
英語の初級者がグロービッシュを使うときも、彼らはもともと語彙や文法知識が限られていますから、**やさしい表現を使わざるを得ません。**つまり、彼らは常にその英語力をシフトアップしていきさえすればよいのですから、一定の目標にはすぐ到達できます。

ところが、上級者の人たちも、ふだんは常にシフトアップだけを心がけていますから、突然シフトダウンしなければならない状況に直面すると、戸惑います。すでに述べたように、これは結構むずかしいことです。

それと同時に、上級者の使う英語と初級者の使う英語の間にあるグロービッシュとの間には、歴然とした境界があるわけではなく、シーム

レスにつながっています。

車を運転する人ならお分かりと思いますが、オートマチック車では、エンジンにかかる負荷に応じて、最も適切なレンジにギアがシフトされるようになっています。



グロービッシュが広まるようになると「英語の達人」とはグロービッシュを適切に話し、相手の話す英語に応じて、自由にシフトアップもシフトダウンもできる人を指すことになるのかもしれませんが。

そんなわけで、グロービッシュという領域の中でコミュニケーションを図る上では、初級者のほうがすぐにその領域に入ることができ、一般的には、上級者のほうがむしろ苦勞すると言えるのではないのでしょうか。

ポイント2

上級者にとって、特定の条件の下での平易な英語を使うことは、知識や技能が進んでいる分、かえってむずかしくなる。

■ 音読で会話力はすぐ分かる

英語によるコミュニケーション能力を評価する TOEIC テストの受験者数は、年間 180 万人に上ります。

このテストは、1978 年に、タイム社の極東総支配人だった故北岡靖男氏がアメリカの英語テスト開発機関 ETS に委託して開発したものです。翌年から実施されたテストの受験者数は 3000 人そこそこ。何年間も財政難が続き、身売り話も出たほどでした。

それが、企業での一括受験が始まりだした 90 年代後半になってから広く普及しはじめ、今日の繁栄に至っています。

こうしたテストの受験者がふえるということは、英語に対する関心の高まりを示すものですから、英語関連の仕事に携わる者としてはうれしいことではありますが、どうしても割り切れない思いが残ります。

それは、私自身が英検（実用英語検定試験）の面接委員を 30 年ほど務めた印象として、日本人の英語力、とりわけ発話能力は、過去数十年間、ほとんど変わっていないと感じているからです。ほとんど変わっていないというのは控え目な表現であって、はっきり言えば、発音に関してはほとんどがまったくダメということです。

しかも、TOEIC で 900 点台、英検 1 級という人ですら、外国人とまともに英語で交渉できない場合があるという事実を何度も目の当たりにしてきました。英語の運用能力は、使わなければ、すぐサビが出るものです。たとえアメリカに語学留学して、ペラペラになって帰ってきたとしても、半年も英語を使わないでいれば、また元の木阿弥^{もくあみ}です。その意味からも、TOEIC が認定したスコアに有効期限を設定しているのは、妥当なことです。

スピーキング能力は、音読をしてもらえば、すぐ分かります。正確に音読できる人は、リスニング能力も高く、結果として会話力も高くなります。

音読するのを聞いて、その可否を判定するには30秒もかかりません。これは、歌の上手下手を判断するのに、1曲全部最後まで聞く必要がないのと同じです。

のど自慢の審査員も、歌う人が合格か否かは、5～6小節聞いた段階で決めているはずですが、すぐ鐘を鳴らしてしまっただけは、本人や聞く人に失礼なので、しばらく歌わせているに違いありません。

音読という作業は、一見簡単なようですが、けっしてそうではありません。脳の中では、ふつう「文字情報の認識」「意味の理解」「音声としての発話」という3つの活動がほぼ同時に行われるのですから、書くことを別にすれば、音読という作業をしているときは、あらゆる言語処理機能が総動員されています。

したがって、学習者が英語を音読するのを聞けば、英語能力のかなりの部分を知ることができるわけです。文字面を単に音声に変えているのか、きちんと意味を把握しながら読んでいるのか、さらにはその内容に応じた感情を込めて読んでいるのか、聞く人が聞けばすべて分かります。

ポイント3

英語のあらゆる技能は、音読の上手下手に反映される。**英語を上達させたいならば、徹底的に正確な音読に時間を割くこと。**

■ テストで英語力は評価できるのか？

ディクテーション（書き取り）という作業でも、テストのかわりに学習者の発話能力を知ることができます。

TOEICの開発に当たって、その学問的な理論づけに寄与された故三枝幸夫氏によると、TOEICのスコアと、ディクテーションの成績との

間には、非常に高い相関関係があるとのことでした。

何時間もかけてマークシート方式によるテストを受けさせなくても、せいぜい15分程度の音読とディクテーションのテストをしてみれば、その人の絶対的な英語能力は、「読む」「書く」「聞く」「話す」のすべてについて、相当高い精度で評価できるのです。

ところが、この方式によるテストには、欠点があります。

それは、音読の評価については、測定する人の主観によって、判断がぶれる可能性があることです。また、ディクテーションの評価も、小さなスペリングミスや句読点の脱落などをどう判定するかによって、得点が異なることもあり得ます。

その結果、多数の受験者との相対的な位置づけを判定するには、不向きな部分もあると言えます。人間が関わる分だけ、コストがかかるという面もあります。

それゆえにTOEICのようなマークシート式のテストが主流になっているわけですが、もっと根本的なことを言えば、実際にコミュニケーションを行うための「英語力」という総合的な力をテストで完全に評価するのは不可能だと私は思っています。

■ 企業にとって重要なパフォーマンス能力

企業にとっては、「英語はペラペラだが、からきし契約が取れない人」より、「英語ベタを自他共に認めているが、海外へ行くと、いつも大きな仕事をまとめてくる人」のほうが断然大切です。

私は、この後者の人のような、「コミュニケーション能力のすべてを駆使して、ある目的を遂行する能力」を、パフォーマンス能力（目的遂行能力）と呼んでいます。

その一部である、「異なる意見を調整する能力」は、特に「ファシリテーション能力」と呼ばれます。

通じるための発音の要領

語学力はあるに越したことはありませんが、それはあくまでもパフォーマンス能力やファシリテーション能力の一部です。

これはあくまでも私個人の仮説ですが、パフォーマンス能力に大きく寄与するのは、自分自身の絶対的な語学力そのものより、相手方の言語の運用能力に、自分の言語のレベルをチューニング（一致）させる能力ではないかと考えています。コミュニケーションが相互に成立するのは、言語能力の低いほうとマッチングできたときに限られるからです。

いずれにせよ、これからはテストのためだけに英語を学ぶ時代ではありません。仕事や学問の成果を上げるために必要なのは、コミュニケーション能力だけでなく、目的遂行能力、つまりパフォーマンス能力です。また、言葉だけが目的を達成するのに欠かせないものとは限りません。そのような点からもグロービッシュは注目されてきているのです。

ポイント4

コミュニケーションやパフォーマンスの能力を構成する要素はたくさんあり、測定できないものは評価もできない。測定できる部分だけを探り上げて一喜一憂する必要はない。**大切なのは、パフォーマンス能力である。**

■ 言語を学ぶ基礎となる「音法」

「文法」と呼ばれるものが「文の法則」について書かれたものなら、発音の法則について体系づけたものを「音法」と呼んでもおかしくないはずです。

しかし、日本の学校では文法についてはいろいろ教わりますが、音法についてはほとんど教わることはありません。

今は音声重視されるようになったので、断片的に教科書で採り上げられることがありますが、私が英語を習ったころは、大学に入るまで、音声に関する体系的な学習をする機会はありませんでした。

「言語の本質は音声である」と言われるとおり、音声について体系的に学ぶことが、その言語の習得にもっとも効率的であるはずですが。

しかし、このように音法について述べていくと、1冊の本では書き切れなくなってしまうかもしれませんので、ここではグロービッシュを学ぶ上で、基本となることがらだけについて述べることにします。

■ 太鼓言語とラッパ言語

私は子どもたちや初心者の方々に英語を教えるときは、世界の言語は「太鼓言語」と「ラッパ言語」に大別されると説明します。

太鼓は、強く叩けば強い音が出ますし、軽く叩けば軽い音が出ます。しかし、音の高い、低い表現できません。

逆に、ラッパは音の高低は表現できますが、強い弱い表現はむずかしく、弱く吹くと音そのものが出ない楽器もあります。

このように、太鼓は音の強弱とそのリズムで表現し、ラッパは音の高低と旋律（メロディー）で表現します。

これを言語に当てはめると、英語は「太鼓言語」で、日本語は「ラッパ言語」です。

英語では、強弱アクセント（ストレス）で単語を区別し、文全体の意味をはっきりさせます。これに対し、日本語は高低アクセントで言葉や文の違いを明らかにします。

「バナナ」と言うとき、日本語なら「バ・ナ・ナ」のどの部分を強く読んでも、意味はたいい伝わります。しかし、英語の場合、これを **ba-na-na** と「バ」を強く言ったり、**ba-na-na** と最後の「ナ」を強く発音したりすると、まず伝わりません。

極端に言うと、「ボナナ」でも「ビナナ」でもかまいませんから、2番目の音節を強く発音しさえすれば、**banana** と理解されます。

このように、英語では母音や子音の発音がどうのこうのと言う前に、単語や文の強く言う部分をしっかり押さえて発音することが、意味を伝達する上で、もっとも大切なことです。

同じように、**hotel** の発音も、[hóutél] のように、後ろにストレスが置かれますから、これを日本語のように「ホテル」と言っても通じません。この場合も、母音が「ホ」なのか、「ハウ」なのかという区別よりも、ストレスがどこにあるかのほうが重要なのです。

また、**banana** でも **hotel** でも同じですが、「ストレスの置かれる母音は長く発音する」ということも、大切なポイントです。

「バナナ」ではなく、「バナーナ」のように、「ホテル」ではなく、「ホウテル」のように発音すると、英語らしい発音になります。

英語では一部を除き、ストレスのある母音の長短によっては意味の違いが生じません。これは重要なことです。

mother を「マザ」と短く発音しても、「マーザァ」と少し長く発音

しても、ストレスが同じなら、意味は変わりません。

日本語では、「おじさん」と「おじーさん」では、意味がまったく違います。ところが、アメリカ人やイギリス人には、この区別がむずかしいのです。

逆に、日本人は、「オウ」を「オー」で代用する傾向があります。**gold** [góuld] や **home** [hóum] を「ゴールド」、「ホーム」と発音しやすくなりますので注意が必要です。

ポイント5

日本語は「ラッパ言語」だが、英語は「太鼓言語」。強弱（ストレス）をしっかり区別しないと、意味は決して伝わらない。

■ ストレスのない母音は、いつでも「あいまい母音化」する

日本語にない母音のひとつとして、あいまい母音と呼ばれるものがあります。発音記号では /ə/ と表記される音です。

この音は、日本語の「ア・イ・ウ・エ・オ」のどれにも聞こえる、文字どおり「あいまいな音」です。この音の発音が日本人はとても苦手です。

この音をどれかの母音に当てて、はっきり発音してしまうと、かえって通じなくなります。むしろ発音しないほうがよいのです。発音しないと言っても、そのまま省けばいいのかというと、そうではありません。「その省いた分だけのポーズをとる必要がある」のです。

たとえば、**What are you talking about?**（何のことを言ってるんですか）という英文では、最後の「アバウト」の「ア (/ə/)」は聞こえなくてもかまいませんが、ほんの数分の一秒でも、ポーズが必要です。

席に人が座っていなくても、空席のまま確保しておくという感じです。この「音の空席」が英語のリズムを生み出す元になっています。

英語では、こうした音の消滅や変化がしばしば起きます。しかし、あまり細かいことにこだわるよりも、全体としての音のイメージをつかみ、それを再現させることに意を注ぐべきです。

ポイント6

音が消滅したり変化したりしても、その分のタイミングをずらすことなく発音することが大切。

■ 正しく発音することがリスニング力を向上させる

自分自身で正しい発音ができない人は、たいていその音をキャッチすることもできません。つまり、**英語の音を聞き分けられるようにするためには、自分自身が正しく発音できるようにするほうが、ただひたすら英語を聞くよりも効果的です。**

さらに聞いた英語を意味がある文として理解するには、音読するときも、意味の確認をしながら発話する習慣をつける必要があります。

「ただひたすら聞けば分かるようになる」「聞き流すだけでOK」という類の教材がいまだに後を絶ちませんが、もしそのようなことが可能かどうか知りたいなら、お経を何百回か聞いてみることをおすすめします。

「かんじざいぼさつぎょうじんはんにははらみったじ観自在菩薩行深般若波羅蜜多時…」というお経は、意味の説明をしてもらわない限り、何百回聞いても、意味を把握することはできません。意味の分からない音声は、単なる「空気の振動あるいはノイズの連続」に過ぎず、それを再現することはできたとしても、適切な場面で使うことなどはできません。使えない音声の連続を覚えることにどういう意味

があるのでしょうか。

このお経の意味が分かれば、どこで区切るべきかも分かりますし、音声として耳に入ってくる区切りごとに、意味が理解できるようになります。意味を理解・確認しながら音読することが、リスニングにはもっとも効果的な練習になります。

ポイント7

ただ単に文を読み、聞くのではなく、**意味を確認しながら読みだけ聞いたりすることが重要**である。

■ カタカナ表記は「有害」か

初級者向けの辞書や参考書には、発音記号の代わりにカタカナで発音を示してあるものがあります。

これの是非については、専門家の中でも意見が分かれます。否定派の人に言わせると、「英語にない音をカタカナで表記できるはずがない」「学習者の発音をおかしくしてしまう」、さらには「日本人の英語をダメにする諸悪の根源」とまで言う人もいます。

これに関して、私は中学生に実験をしたことがあります。私が読む英文を、そのままカタカナで書き取ってもらいました。そしてその書き取ったものを「英語として」読み上げてもらうのです。

すると、ほとんどの子どもが、日本語の音声としてではなく、ふつうの英文を読むのと大差がない発音で読み上げるのです。特に英語が得意な子では、十分意味の分かる英語として再現しました。

このことは、カタカナを、英語音を表記するための記号またはメモとして認識する限り、彼らの獲得した英語音をおかしくすることはないと

いう可能性を示しています。

つまり、英語の音声を正しく発声できるかどうかということと、それをどう表記するかということは別問題だということです。

たとえどれほど発音記号について知識があっても、それに基づいて実際に正確な音声が出せなければ意味がありません。

/l/ と /r/, /s/ と /th/ の違いといったことについてとやかく言うよりも、意味の構成をなす音声のイメージを、全体としてそっくりつかむ訓練のほうが大切です。それは、絵画を学ぶ人が、対象物のデッサンから始めるのと同じことです。

ポイント 8

英語の音声を記録するには、各自の**学習段階に応じた方法で表記すればよい**。ただし、その正確な発音については、しっかり練習する必要がある。

■ 子音が重要な英語

英語では子音の発音がとても大切です。特に日本人が苦手なのは、extra [ékstrə] (特別な) という単語の中にもあるような連続する子音の発音です。どうしても「エキストラ」のように母音が入り込んできます。そうならないように、意識して練習しておくべきです。

同様に、語尾の発音も意識して強く発音しないと、意味が通じないことが多々あります。日本語では、語尾が子音だけで終わることは、ほとんどありません。しかし英語ではしっかり発音しないと通じにくくなるのです。

昔、アメリカに行ったとき、Where's the restaurant? (レストランは、

どこですか) と尋ねたつもりなのに、トイレに案内されたことがありました。restaurant の語尾の t が弱かったために、restroom (トイレ) と聞き間違えられたのです。

その点、一般に韓国の人は、語尾の子音をきれいに発音します。韓国語にはパッチムと呼ばれる、子音語尾の言葉があります。これが次の言葉と連続してさまざまに変化します。フランス語のリエゾン (音の連続による変化) と同じ現象も、しばしば起こります。

韓国語で「娘」に相当する「タル」という言葉の「ル」は、英語の little [lɪtl] の語尾の /l/ とまったく同じです。これは日本語にはない音です。

韓国語には子音の数が21もあります。この点だけをとっても、こと英語の発音に関しては、韓国人は日本人に比べ、圧倒的に有利です。

たかが語尾の子音くらいと思ってはいけません。語尾を強く意識して発音するようにすることによって、英語は格段と通じやすくなるのです。

ポイント 9

日本語では「雑音」にしか聞こえない子音が、英語では立派な意味を持つ音声であることもある。**英語の発音の決め手は、子音を確実に発音することにある**。

■ 意味の切れ目には、ポーズをおく

入門期の人に音読をしてもらおうと、必死で読むためか、意味内容に関係なくポーズがおかれたり、やたら速かったりするだけで、意味がさっぱり伝わってきません。おそらく読んでいる本人も意味が分かっていないのでしょう。

意味の区切りごとに、ポーズをおいて読むことは、聞く相手に意味を伝える上で、非常に重要なことです。これは、音読だけでなく、普通に話をするときも同様です。

話の上手な人は、このポーズのとり方がとても上手です。必要に応じて聞く人に考える余裕を与えてくれるので、とても内容が理解しやすくなります。

英語で話すときも、話すスピードよりも、むしろ、この間のとり方が大切です。スピードがある一定の範囲からはずれて遅すぎると、かえって意味が分かりにくくなるという研究結果もあります。

間をおくのは、文と文の切れ目になることがほとんどですが、文の途中で意図的にポーズをおくこともあります。

具体的には、文で書くときに、カンマ（,）やコロン（:）がおかれるところでは、そこにポーズをおくようにします。

When I was a child, Father bought me many books.

（子どものころ、父は私にたくさん本を買ってくれた）

意味の切れるところでポーズをとれば、多少間延びしても、聞いているほうは苦になりません。しかし、意味の切れないところで絶句されると、聞いているほうは意味がわからなくなります。

また、相手が理解できていないと思ったら、そのまま話を続けず、別のやさしい表現に言い換えるなどの配慮も大切です。

ポイント10

一本調子の発話は、意味が伝わりにくい。**センスグループ（意味上の区切り）を意識して発話すれば、相手にとって大変分かりやすくなる。**

■ 英語のリズムで話す

ひとくちに、俳句は五七五の十七文字、短歌は五七五七七の三十一文字などと言いますが、この場合の「文字」とは、ひらがなやカタカナの文字の意味ではなく、厳密に言うと、「モーラ」と呼ばれる拍子を意味します。つまり、俳句なら五拍・七拍・五拍のリズムに合わせて句を作りなさいということです。

「ちゃ」「ちゅ」「ちょ」などの拗音^{ようおん}は、文字数は2文字ですが、モーラとしてはひとつです。「買ってくる」「持っていく」などの「っ」^{そくおん}（促音）は、そのままひとつのモーラを作ります。「コールセンター」「ベースボール」などの「ー」（長音）もひとつのモーラに数えられます。

日本語は、このモーラに着目すると、2拍子で読むことができます。2拍子というのは、行進曲のように、「ズン・チャ」「ズン・チャ」という、歩くときのリズムです。

これに対し、英語のモーラは、3拍子が基本です。3拍子は「ズンチャツチャ・ズンチャツチャ」というワルツのリズムです。

昔の歌で、「ケ・セラ・セラ」という曲があります。When I was just a little girl, I asked my mother what will I be?（子どものころ、私は将来どうなるのかしらって母に聞いたわ）という詞で始まります。

この歌は3拍子ですから、ワルツです。そして、詩として朗読するときでも、「ズンチャツチャ・ズンチャツチャ」と手を叩きながら読むと、英語らしく聞こえます。

日本語 = 2拍子



英語 = 3拍子



さらに、日本の民謡や演歌は、“ズンチャ、ズンチャ”のように、た

コミュニケーションのコツ

いてい前乗りの拍子ですが、洋楽では、“ズチャーチャ、ズチャーチャ”のような後乗りの拍子が少なくありません。

そんなわけで、日本語と英語では拍子が違うということだけは、いつも意識しなければいけません。日本人の英語が、どんなに発音が正確でも、なんとなく英語らしさに欠けるのは、このリズムに乗り切れていない場合がほとんどです。

そのことに関して、おもしろい話があります。

欧米系のホテルに限った話ですが、あなたが部屋の中において、誰かがドアをノックするのを聞いたとき、それが欧米人か日本人か、すぐ分かる方法があります。

日本人は、ほとんど「トン・トン」と軽く2つ叩きます。正に2拍子です。

それに対し、欧米人のときは、「コツ・コツ・コツ」と、しっかり3回叩くのです。

これはかなりの確率で当たります。ぜひ、試してみてください。欧米人の意識の中にあるのは常に3拍子であることの表れかもしれません。

ポイント11

英語のリズムを意識し、それに乗って話すことが大切。 そうであるかないかによって、伝わり方もその自然さもまるで違ってくる。

■ 言葉だけがコミュニケーションの手段ではない

欧米人に限らず、日本人でも、話の上手な人を観察してみると、言葉だけでなく、顔の表情や身振り手振りを上手に使っています。

また、ひたすらゆっくりしゃべればよいかというと、ゆっくり話しすぎることによって、意味が伝わらなくなることもあります。

このように、話し言葉でコミュニケーションをとるときは、言葉そのものだけでなく、以下のように、ざっと考えただけでも7つ以上の要素が効果的な伝達に関わってきます。

- ① 声の抑揚（上げ下げ）、強さ
- ② 声の質、明瞭さ
- ③ 話す速さ
- ④ ポーズのとり方
- ⑤ 顔の表情
- ⑥ 身振り手振り
- ⑦ 目線の合わせ方

落語家の話し方を見ていると、以上のどれをとっても、徹底的に研究していることが分かります。

言葉そのものが不完全でも、以上のような要素を考慮に入れて話せば、伝わり方がまるで違ってきます。

こうした練習は、日本語でもできることです。日本語さえはっきり伝

達できない人が、まして英語で上手に意思の疎通ができるはずがありません。

特にもごもご口を開かずに話す人は、文の語尾を飲み込んでしまう傾向があります。英語では語尾の子音をはっきり発音しないと、意味が伝わらないことがあります。

単語や文のストレス（強勢）も、少しオーバー気味につけると、分かりやすくなります。

ポイント 12

英語での意思疎通を考える前に、日本語で話すときも、**内容のある明瞭な音声で話す習慣をつけることが大切。**

■ コミュニケーションには戦略が必要

母語の場合も同じですが、外国語で意思疎通を図るときは、戦略が必要です。戦略と言うと物騒に聞こえますが、要するに思いどおりに事を運ぶための方針です。

「敵を知り、己を知れば、百戦危うからず」と言いますが、外国語でコミュニケーションするときは、その際に使う言語に対する相手の素養がどの程度なのかを知っておくことが大切です。

相手がネイティブスピーカーやそれに準ずる人で、自分がそうでないなら、まともにぶつかれば、勝ち目はありません。いろいろな方策を練らなければ、相手の思いどおりにされてしまうかもしれません。

伝えるべき立派な内容を持っているのに、英語をうまく使いこなせないために、それを伝えられないということほど歯がゆいことはありません。

本来、相手も自分も非ネイティブなら、立場は同じなのですから、それぞれの運用能力次第で、こちらにも勝機があります。

グロービッシュで話し合うときだけでなく、普通の英語を使うときでも、自分の英語力を過大評価されないように、前もってそのレベルがどの程度であるのか、伝えておくに越したことはありません。

私自身も過去において、背伸びしたためにひどい目にあったことが何回かあります。

自分の英語力を説明するのに、「私はグロービッシュを話します」と限定してしまえば簡単ですが、まだ分からない人も多いでしょう。そんな場合は、

I only speak in 9th-grade-level English. (中学3年レベルの英語でなら話せます)

と断っておくのもひとつの方法です。

また、TOEFL や TOEIC のスコアで伝えるのもひとつの方法です。使用する単語だけをベースとして考えると、グロービッシュの想定する TOEFL スコアは、だいたい 100 程度、TOEIC では 400 点台後半となります。

■ 読みやすさの指標

Globish The World Over (『世界のグロービッシュ』) 中の英文を調べたところ、その読みやすさの尺度であるリーダビリティスコアは、GLE (Grade Level Equivalents) で 7 から 10 で、平均は 9 程度でした。このことは、欧米の中学3年生なら、そのほとんどが理解できることを示しています。

GLE とは、学年水準相当値のことで、欧米の初等中等学校の学年に相当する読みやすさの指標として広く使われています。この数値が大きくなるほど、その英文がむずかしくなることを示します。最低は 1 (学

年)、最高は17(学年)までの18段階があります。(1-6:小学生レベル、7-9:中学生レベル、10-12:高校生レベル、13より上は大学生レベル以上)

日本の中学3年生の教科書の英文は、アメリカの小学校で使われる教科書の2~3年生向き程度の難易度です。

したがって、GLE 9というのは、だいたい日本の高校の教科書に出てくる程度の英語に当たるものです。

リーダビリティという尺度の他に、リスナビリティ(聞き取りやすさ)という概念もあります。口頭でのコミュニケーションの場合は、リスナビリティを引き合いに出すほうが意味があるのですが、音声の性質上、どうしても録音という手段をとらないと、分析できません。

いずれにしても、ベースになる単語が1500語という、おおよその基準を設けているグロービッシュで話すことを申し合わせておけば、お互いが話す英語のレベルに大きな違いは生じません。

グロービッシュというコンセプトが一般に認知されるまでは、あり得なかったことですが、これからの国際会議やビジネスの交渉では、どんなレベルの英語をお互いに使うのか、あらかじめ申し合わせておくことが、当たり前になるかもしれません。

それは、パーティーや晩餐会ばんさんかいにどのような服装で行くべきかを申し合わせておく、ドレスコードと同じようなものです。正装で行くべき席に、ひとりだけ普段着で行けば恥をかくように、カジュアルな英語でよいという席でかしまった英語を使えば、そのほうがかえっておかしなことになります。

ポイント13

重要な話し合いでは、どのように話を進めるのか、事前の方針を立てておくこと。**どのレベルの英語を使うのか決めておくことは、非ネイティブ同士の会談では非常に大切なことになる。**

■ 会話で予想されるキーワードを調べておく

同時通訳者なら誰でもすることですが、通訳の対象となる会議や対談などで使われると思われるキーワード、つまり重要な語句について、あらかじめ調べておくことが大切です。

どんなに優秀な通訳者といっても、森羅万象について専門的な言葉を知っているわけではありません。こうした下調べは必須なのです。

パーティーなどで交わされる単なる世間話なら、そのような予習はいらないかもしれませんが、しかし、重要なビジネスの交渉などでは、キーワードを知らなかったために、恥をかくだけでなく、自分たちの側に大きな損害をもたらす結果となることもあり得ます。

ポイント14

会話や会談の主要テーマとなる内容について、その**キーワードは、必ず事前に調べておくこと**。これによって、余裕を持って話し合うことができる。

■ 会話では主導権を握る

言葉に関する技能には、「聞く」「話す」「読む」「書く」という4つがありますが、ラジオやテレビの視聴のように、一方的に聞く作業は、結構たいへんです。「読む」という作業も、本当はとてもむずかしいものです。それは、対象物がいっさい手加減をしてくれないからです。

その点、目前の相手と話す、いわゆる「会話」は、いちばん楽です。なぜならば、お互いに通じないと知れば、いくらでも噛み砕いて、言い換えることができるからです。

さらに、「話すこと」については、自分の知っているフレーズや文をアウトプットするだけですから、もっとも簡単です。

それにもかかわらず、たいていの方は、「読むのは何とかできますが、話すのはダメです」と言います。

それは、おかしな話です。相手や対象物が手加減してくれないという意味において、もっとむずかしいはずである「読むこと」はできるのに、もっとも簡単な「話すこと」ができないはずがありません。

もし本当に会話が苦手だとすると、それは、相手に常に会話の主導権を握られているからです。この本でもっとも強調したいことのひとつなのですが、会話は主導権を持ったほうの勝ちです。語学に関する知識の量とは関係ありません。

相手がしゃべったことで、自分が分からない話題には深入りせず自分が分かることを中心に話していけばよいのです。そのためには相手にたくさん質問をして、自分が詳しい領域の話題に引っ張り込めば、会話の主導権を握ることができます。

囲碁や将棋には「先手必勝」という言葉があります。一手でも先に動いたほうが勝つのは当然という考え方です。これは外国語での話し合いにも当てはまります。

ポイント 15

会話では、その主導権をとることで、楽に、しかも有利に交渉ごとなどを進めることができる。そのためには、まず常に**自分**から会話の口火を切ることが大切。

■ 質問には質問で返す

会話をしている相手が、自分の分からないことを尋ねてきたときは、どうしたらよいでしょう。

この「分からない」という状態には2種類あります。ひとつは、相手の話す英語そのものが聞き取れない場合。もうひとつは、質問の意味は分かるのですが、どう答えてよいか分からない場合です。

英語そのものが分からないときは、**Pardon (me)?**とか**Excuse me?**と言って、**何回でも聞き返せばよい**のです。何回か聞き返せば、相手は別のやさしい尋ね方に変えるか、話題そのものを切り換えてくれるはずで。

特に、グロービッシュで話しているのなら、**通じないのは聞き手の責任ではなく、話し手の責任**です。

質問の趣旨を理解した上で、質問に答えられないときは、**I'm afraid I don't know about it.** (それについては知りません)とか、**Excuse me, but my knowledge on that is limited.** (すみませんが、それについての知識はあまりありません)のように言って、他の話題に振り向けるようにします。

分からないのに、分かったふりをしたり、適当に答えたりするのはもっとも良くありません。

ここで重要なポイントは、相手から質問されて答えられないとき、黙り込んではいけないということです。沈黙してしまうと、相手は英語が理解できないのか、理解できているのに答えられないのか区別できません。英語そのものが分からないなら、そのことを伝えなければなりません。

攻撃は最大の防御と言います。いちばんいい方法は、同様の質問を別の角度から相手にぶつけることです。

質問の形式は、Yes か No か、A なのか B なのかという選択疑問文の形式で尋ね、相手がそれに答えたら、**Why's that?** (それはなぜですか)と重ねて理由を聞くようにします。

会話では、分からないことは分からないと言い、相手に質問すること

で、主導権を握ることができるのです。

ポイント16

一対一の会話では、会話の主導権を握ること。**分からないことは分からないと言い、質問される前に質問すること。質問されたら、こちらからも質問する**ことを心がける。

■ 気後れする相手は、専門領域に引きずり込む

どんな商売をする人でも、それぞれの商売の中で、専門の領域や得意とする分野があります。得意なことなら「師匠」とか「先生」と呼ばれる人でも、それ以外のことになると、まるでダメということは、よくあることです。

タクシーのドライバーでも、たいてい得意とする地域があります。その地域の中なら効率的にお客を見つけ、効率よく仕事ができます。ですから、地域外に行ったときは、そこでお客を探すのではなく、すぐに自分の縄張りに帰ってくるドライバーがほとんどだそうです。

日本語で話すときでも、相手が上司であったり、偉い人だったり、年上の人だったりするときは、どうしても緊張し、共通の話題に事欠くようになります。そうすると、なかなか会話が弾みません。

ましてそれが外国語でとなると、二重に負担がかかるわけで、沈黙の流れる時間が多くなりがちです。

それを避けるには、**自分が得意とする専門分野や、よく知っているテーマに話題を切り換えていくことが重要です。**

たとえば、自分がゴルフが得意なら、何らかのきっかけで、話題をゴルフに関連づけて、相手の関心をそちらに向けるようにします。

自分の知識が豊富な分野なら、たとえ相手がネイティブであっても、相手の知らない話題をこちらが知っていることが少なくありません。それを相手にぶつけてみて、それを相手が知らないようなら、そこから話題を広げていくことも可能です。

こうした戦略を立てることは、英語力のギャップを埋める上で、とても大切なことです。

ポイント17

多少言葉に自信がなくても、自分が熟知している話題なら、相手をリードすることができる。**沈黙が訪れそうになったら、意識して自分の得意な領域に引き込め。**

■ 文の構成力より音声による表現力が大切

あなたと話している人が、あなたが何かしてあげたことに対して、Thank you. (ありがとう) と言ったとします。これに対して、「こちらこそ」と応じるには、どう言えばよいでしょうか。

たいていの人は、「どういたしまして」に当たる表現として、

You're welcome. / No problem. あるいは Don't mention it. などを思いつくことでしょう。

どれも正解です。ほとんどの会話本にも、そう書いてあります。しかし、もっと簡単な言い方があります。

それは、Thank YOU. と、you (あなた) を強調して言い返す方法です。

しかし、ふつうこの方法を、学校では教えてくれません。

もうひとつ例を挙げましょう。

あなたの友だちの外国人が、I went to Nikko last week. (先週、日光に行きました) と言ったとします。これに対して、「ああ、そうですか」と応じるには、何と云えばよいでしょう。

これも「そうですか」に対する表現として、

Is that so? / Is that right? などの文を思いつく人がかなりいるはずです。

しかし実際は、Oh, did you? / You did? のように応じるのが自然な受け応えです。これも学校ではなかなか練習する機会がありません。

このように見てみると、私たちの話す英語は、どうしても母語である日本語の発想に縛られ、その日本語に一对一に対応する文章を組み立てようとする習癖から抜け出せていないのです。

そのために、英語で何かを話そうとするときは、日本語に対応する単語をひとつひとつ英語に置き換え、頭の中で文を組み立てようとするため、長い時間がかかってしまいます。

つまり、返事をするまでに時間がかかり過ぎてしまい、そのまま沈黙するしかなくなります。しかも、ようやく出てきた英語が英語らしい表現になるならともかく、頭の中で組み立てた文は、英語にはなっていないということも少なくありません。

こうなってしまう原因のひとつとして、学校での英語教育のあり方に問題があると私は思っています。

今の中学校の教科書を見てみると、これは英会話の本かと思うほど、ほとんどのページがダイアログのスタイルになっています。つまり会話体です。

これは、「コミュニケーションを重視しています」という文部科学省や教科書会社の意向を反映させたものなのですが、実際には教育現場では、この趣旨は徹底されていません。

なぜなら中間テストや期末テストの形式が、相変わらずペーパーテ

トだからです。昔と同じように、テストが近づくと、子どもたちはせつせとペーパードリルをやり、習った範囲の英語を書き言葉として記録できるように励みます。それが「実力」として評価され、成績として反映されます。現場では「読む」、「書く」、に重点がおかれ「聞く」、「話す」にはまだ重点はおかれていないのです。

文部科学省の学習指導要領には、「読む・聞く・話す・書く」の4技能をバランスよく育成するようという趣旨の記述がありますが、聞くことや話すこと、特に話すことについての評価は、教育現場ではほとんどされていません。これでは、話す能力が身につくはずがありません。

現場の先生を弁護するならば、話すことの測定や評価は、とても手間のかかる仕事です。リスニングテストはいつせいにできますが、スピーキングテストは個別に行わざるを得ません。今の教育体制の中では、話す能力の評価は、実際問題として無理です。

よく、中学・高校・大学と10年間も英語を学習しても、話せるようにならないと指摘されますが、現実の問題として評価されない技能を、生徒や学生が身を入れて学ぶはずはありません。

■ 書き言葉では文法がおかしくても、話し言葉では通用する

次の日本語に相当する内容を、囲みの中の単語を使って英語で話してみてください。

「これは、父がくれた時計です」

this, watch, Father, gave, me,
is, the, that

This is the watch that Father gave me.

という文を即座に言えた人は、それで正解です。

しかし、たとえ、この文ができて、それを言えるまでに**5秒以上**かかった人は、**不正解**です。なぜなら、オーラルコミュニケーション（口頭での会話）の場合、沈黙が5秒以上続くと、間が持たないので、別の話題に移ってしまう可能性が高いからです。

話し言葉では、思いついたことを**5秒以内に発話**することが重要です。それは、たとえ文法的には正しくない文であっても、話題をそらさないために、大切なことです。

この例題の場合、話し言葉なら、上の行だけをそのまま読んで、**This watch, Father gave me.**（この時計、父がくれました）と言っても十分通じます。もちろん、**Father gave me this watch.** とすれば、文法的にも正しい文になります。

以上のように会話では、正しい英文を5秒以内に言えれば理想的なのですが、多少間違っている、5秒以内に話すことが大切なのです。

ポイント 18

オーラルコミュニケーションにおいて発話される英語に価値があるのは、**発話すべきときから5秒以内に発話される場合に限る**。それは、その英文が文法的に正しいか、正しくないかには無関係である。

一章分まるごと読める「サキ読み」

「立ち読み」のサービスをご利用いただき、

ありがとうございます。

お読みいただきました書籍の

タイトル・本文は、本サービス掲載時のものです。

実際の刊行書籍とは、一部異なる場合がございます。

あらかじめご了承ください。

株式会社 サンマーク出版

<http://www.sunmark.co.jp/>